

ベンガルの農村

プログラム

「アジアの時代と日本」（同時通訳つき）

日時：1995年11月2日木、3日金
場所：広島国際会議場（広島市平和公園内）

●第1日（11月2日木）

登録 8:30～9:00
挨拶 9:10～9:15 原田康夫（広島大学長）

□問題提起（9:15～9:30）
山下彰一（広島大学大学院国際協力研究科長）

□第1分科会（9:30～11:30）
テーマ：「アジアにおける異文化の共存」
座長：石井米雄（上智大学アジア文化研究所教授）
報告者：アリフィン・ペイ（マラヤ大学客員教授）
報告者：金日坤（韓国：釜山大学アジア問題研究所長）
討論者：オマール・ファルク（広島市立大学教授）
同 F. シオニール・ホセ（フィリピン）
同 今永清二（広島市立大学教授）

□第2分科会（13:00～15:00）
テーマ：「21世紀におけるアジア安定の政治的条件」
座長：黒柳米司（大東文化大学教授）
報告者：ジョイス・カルグレン
（カリフォルニア大学ディヴィス校名譽教授）

報告者：リー・ライト（シンガポール大学教授）
討論者：ノラニット（タイ・タマサート大学長）
同 朱建榮（東洋学園大学助教授）
同 五百旗頭真（神戸大学教授）
同 中達啓示（広島大学大学院国際協力研究科助教授）

□第3分科会（11月2日木15:30～17:30）
テーマ：「アジアの開発と教育」
座長：潮木守一（名古屋大学教育学部教授）
報告者：ドロジャトーン・K.（インドネシア大学経済学部長）
報告者：牟田博光（東京工業大学教授）
討論者：程天権（中国復旦大学副学長）
同 西野文雄（埼玉大学政策科学研究所教授）
同 中山修一（広島大学国際協力研究科教授）

□歓迎懇親会（18:00～20:00）広島国際会議場

●第2日（11月3日金）

□第4分科会：総括討論（9:30～12:00）
テーマ：「アジア時代における日本の進路」

座長：山下彰一（広島大学）
問題提起者：石井米雄（上智大学）
同 黒柳米司（大東文化大学）
同 潮木守一（名古屋大学）
討論者：参加者全員

三・プログラムと基調講演者並びに討論者

本シンポジウムは、別掲のプログラムのとおり十一

さて、本シンポジウムは、発展目ざましいアジア諸国と日本の関係に焦点を当て、今後日本が進むべき方向や進路を討論することが主なねらいである。その前提として、アジア各国の宗教や文化の違いや共通点を理解し、文明や歴史の異なるアジア各国との交流のあり方を検討する（第一分科会）。また、アジア諸国の経済的台頭が外交や安全保障問題にどのような影響を与えるかについて、とくにアジアの安全保障や政治的安定の条件等を討論する（第二分科会）。さらに、開発と教育の関係を論じ、人材育成の課題や大学の役割などを議論する（第三分科会）。最後に、これらの討論を踏まえて、日本がアジア各國とどのような協力関係を構築し、これから何を行動基準とし、どのような戦略を選ぶべきかを議論し、併せて日本の大学の将来課題と新たな方向を探り、アジアの人材育成や教育協力における広島大学の役割などについて総合的に討論する（第四分科会）。

☆このシンポジウムでは、まず、アジアの多様な文化や宗教の特質を理解し、アジアにおける異文化の共存の可能性を探る。
☆アジアの安全保障について論じ、アジアにおける政治的安定の条件を検討する。
☆開発と教育の問題を取り上げ、アジアにおける人材育成の必要性を考える。
☆最後の総合討論では、アジアと日本の関係や、日本並びに大学の進むべき将来の方向を、幅広く討論する。

一・経緯

このシンポジウムは、統合移転事業の一つとして、法学部、経済学部、国際協力研究科それに国際交流課から成る国際シンポジウム部会によって昨年から準備されてきた。

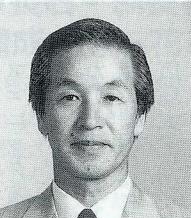
フェックススタ 総特集

国際シンポジウム

アジアの時代 と 日本

21世紀はアジアの時代といわれる。

しかし、日本はこのままでよいのだろうか。アジアに関心が薄い日本は、その態度故にアジア各国から仲間はずれにされる可能性がある。



大学院国際協力研究科長
山 下 彰 一

最初の仕事は、このシンポジウム開催のために、文部省の国際学術研究集会の助成を頂くことであった。文部省には三、四回説明やお願いに行って、幸いにもこの申請を認めてもらい、約三百万円の助成を頂いた。テーマについては、いろいろな意見が出されたが、しかし、現在の世界情勢を考えたとき、やはりアジアの重要性が増している現実を認識する必要があり、アジアをテーマとしていることで一致した。特に日本の将来を検討する際には、アジアの視点が欠かせないという現状認識がありました。当初のテーマは「アジア時代における日本の文化・外交のあり方と国際協力」としていた。テーマによりふさわしい標記のテーマ、「アジアの時代と日本」に変更した。

このテーマの背景として、世界が大変革期を迎えており、日本の政治や官僚機構は旧態依然としており、最近は日本人の傲慢さを強く批判する場面に出ており、アジアの人たちは日本のことをよく知つておらず、親身で付き合ってきたとは言い難い。逆に、アジアの人たちは日本人のことも無関心である。アの国々や人々に、日本人はあまりにも無関心である。このまま推移すれば、ゆゆしき事態が発生しないとも限らない。このシンポジウムは、そうした事態が生ずる前に、アジアの人たちから日本を叩いてもらおう、そして日本が進むべき方向について何かご示唆を頂こう、という意図を持つて開催されるものである。

二・シンポジウムのねらいと内容

月二日（木）と三日（金）の二日間にわたって実施される。招待された基調講演者並びに討論者は、座長を含めて二十名であるが、海外からはインドネシア、タイ、シンガポール、マレーシア、中国、韓国、フィリピン、アメリカの研究者や作家が含まれている。なかには、アジアのノーベル賞といわれるマグサイサイ賞を受賞したフィリピンの作家、シオニール・ホセ氏がいる。

第一分科会の「異文化の共存」には、カトリックの国フィリピンのホセ氏や、イスラムの研究者アリフィン・ペイ氏（現在マラヤ大学）、ファルク・オマール教授（マレーシア）、今永清二教授（広島市立大学）、教授（大東文化大学）が座長を務める。第三分科会は、「開発と教育」がテーマであり、この分野で著名な潮木守一教授（名古屋大学図書館長）を座長に、最近次々と業績を発表している牟田博光教授とインドネシア大学経済学部長で論客のドロジャトント教授が基調講演する。討論者には中国の復旦大学副学長の程天権教授、西野文雄教授（埼玉大学）、国際協力研究科の中山修一教授が加わる。

第四分科会は、総括討論で、各分科会の議論を踏まえて、日本とアジアの関係、日本の進路、大学の役割などを包括的に論ずる。各分科会の座長に総括報告をしていただきた後、参加者全員で総合討論をする。座長は、山下彰一国際協力研究科長が務める。これだけのメンバーを集めているので、かなり突つ込んだ議論が期待され、この分野の研究者だけでなく、興味半分で聞かれる方にも強い刺激を与えるものと思われる。是非とも友人知人を誘ってシンポジウムに参加して欲しい。同時通訳で行うので、学生諸君にも聞いて欲しい。（やました・しおいち）